どこでも アート 小さな家 プロジェクト

旅する小さな家プロジェクトァート空間デザインコンペ

2014年7月9日~12日・13日 埼玉県立近代美術館講堂 / 11月9日 ヒアシンスハウス前庭

する小さな家〉と題して、広くそのアイデアを募り、そ のなかから最優秀案を選んで実際に制作するとい うコンペを開催しました。特徴的なコンペ趣旨、豪華 な審査員の顔ぶれ、実際に制作されることなどから注目を集め、 国内外から201点もの設計案の応募がありました。7月13日に埼 玉県立近代美術館でおこなわれた公開審査会では、種田元晴さ んの進行のもと、長谷川豪さん(建築家)、平田五郎さん(美術 家)、北原立木さん(小説家)が審査にあたり、水谷隼人さん+山 本恭代さんの案が最優秀賞に選ばれました。その後、約4ヵ月間 の制作期間をへて、11月9日にさいたま市の別所沼公園の「ヒア シンスハウス」の前庭にてお披露目となり、当日には創作ダンス、 平田五郎さんによる美術インスタレーション、完成を記念したシン ポジウムもおこなわれました。シンポジウムではまず、設計チーム を代表して水谷隼人さんより、スライドと製作過程のムービーを 流しながら旅する小さな家を紹介していただきました。

続いて、審査員3名より、ご自身の専門分野でのお仕事と旅する 小さな家との関わりをご講演いただきました。北原立木さんは、建 築の虚構性と文学の虚構性との違い等を示しつつ、自身の著作 『タマ子』や『枕草子』などと絡めて、完成作品を体験してみての感 想をお話いただきました。平田五郎さんからは、視点を変えること による非日常の獲得をめざしたご自身の作品について、特にカナダ のクィーン・シャーロット島や南東アラスカでのフィールドワークに よる神話の世界からヒントを得た一連の作品群「INSIDE PASSAGE-月を盗んだワタリガラス」について解説いただきまし

た。「小さな家」と違って、旅をするのは作品ではなく自分。自身の 個性が顕著な作品をつくるというよりも、その場所場所の特性を じゅうぶんに体感したうえで、その場所にふさわしいものを作る姿 勢を示されました。長谷川豪さんからもご自身の作品について、特 に2012年にTOTOギャラリー・間から石巻の幼稚園へと旅した 「石巻の鐘楼」について、鐘楼の企画の発端から製作過程、旅する 様子などをお話いただきました。今後の旅する小さな家に示唆を 与えてくださる内容でした。そして、小説家・美術家・建築家からの 視点で旅する小さな家との関わりを示していただいたことを踏ま え、鼎談としてまずは審査員3名より完成作品について改めてコメ ントをいただきました。ここでは、空間の均質さ、ヒアシンスハウス との位置関係、今後の想定設置場所等について審査員各位から 指摘・質問がなされ、それに対して設計チームが答えるという場 面がありました。設計者からは今後、ヒアシンスハウス前庭とは異 なる駅前などのにぎやかな場所に置いてみたいとのコメントがあ りました。今後の「旅」については、場所性に対しての観念がより深 く表出される配置計画、敷地選定が望まれます。

最後に、司会の種田元晴さんより、ヒアシンスハウスも周囲の環 境との関係が非常に意識された建築である旨を述べられたうえ で、場所性に関しては広域のどこに行くべきかという問題と、その 場所にどのように配置するかという問題の二つがあるとのコメン トがあり、今後の「旅」に注目していきたいということで幕を閉じま した。公開審査会やシンポジウムでの白熱した議論、インスタレー ションや創作ダンスが「旅する小さな家」とその周囲の環境を巻き 込んで作り出した空間性もすばらしく、またコンペの応募数やお披 露目当日の来場者数といった数字が示すとおり、おおいに盛り上 がった事業となりました(当日、NHKテレビとラジオの昼のニュー スで取り上げられたこともあってか、多数の来場者がありました)。

以上が「旅する小さな家」(今後も旅をする予定ですので、正確 には「今年度の」)の概要なのですが、この記録集原稿の執筆にあ たって、あらためてこの企画について、特に「コンペ」ということにつ いてふりかえってみました。コンペで案を広く公募しようというこ とになったのは基本的には、老若男女の誰もがそのプロセスに参 加できるという「あなたとどこでもアート」な枠組みからくるもので すが、個人的にはもうひとつのもくろみがありました。それは、この コンペを通じて、コンペ参加者のなかからSMFの活動や関連する 活動に参加してくださる人がでてくるかもしれないというものでし たが、それは成功したとは言えず、そう容易ではないとあらためて 実感しました。まず「最優秀案を実際に制作する」というコンペの 内容が、数多くの新規メンバーの獲得という意味では障害でし た。実際に制作される案以外にも、それにともなうインスタレー ションの提案として秀でたものを特別賞などとして選び、そういっ た案の提案者の方がたにも、この企画の実現までも含めて参加し てもらおうというねらいをもっていましたが、審査においては「制 作する案を選ぶ」ということがもっとも重要かつ困難な作業であ り、審査の大半の時間がそこについやされました。結果、特別賞な どの賞を設けてはいたものの、それらは「惜しくも最優秀案とはな らなかった案」となり、他の観点からのものにはなりませんでした。

加えて、審査の観点も「それ自体の作品としての強度」を求める ものとなり、それが多くの人を巻き込んでいくようなものを選ぶと いうよりも、それ自体が完結した「作品」となるものを選び出す作 業となりました。それは、制作案一点を選ぶというコンペの性格、 またコンペ応募者の大半もそれを期待していたであろうと想像す ると、それがコンペというものの必然の結果なのだということを学

今後、SMFで活動をともにできる人を巻き込んでいきたいとの 想いも込めた「コンペ」という形式は、他のどのようなたぐいの企 画よりも一過性のイベントとしての性格が強いものだったのかも 知れません。NHKのニュースでも「200点以上の中から選ばれた ……」という紹介がなされていましたが、その参加者(応募数)の 多さがつくるはなばなしさとは裏腹に、もしくはそうであるからこ そ、そこを勝ち抜いた一作品のためのイベントでもありました。

さて、僕の「もうひとつのもくろみ」はさておき、冒頭にも述べた とおり、「旅する小さな家」はとにかく盛り上がりました。インスタ レーションとダンスパフォーマンスの力もあいまって、まずはその 第一回目の旅先において、ちょっと不思議な、そして魅力的なアー ト空間が出現しました。最優秀賞受賞者で設計者の水谷隼人さ んと山本恭代さん、そして審査会後に設計チームに加わった山崎 千恵さんの三者による数多くの模型検討、さらには原寸の試作に よって検証を重ねた結果です。作家のみなさまの熱意に敬意を表 したいと思います。(YouTubeで動画がご覧になれます。旅する小さな家完 成版で検索してください) 佐野哲史(SMF協力委員)







旅する小さな家の設計チーム 左から山本恭代さん、山崎千恵さん、水谷隼人さん







アシンスハウスに設置した美術インスタレーションを解説する平田

アート空間デザインコンペ「旅する小さな家」

作品応募受付期間:2014年6月14日~30日 応募作品展:7月9日~12日(4日間計399人) 公開審查会:7月13日(参加:163人) コーディネーター: 種田元晴 審查員:北原立木、長谷川豪、平田五郎 受賞作品展示:7月15日~8月31日

アート日和 旅する小さな家がやってきた!

1月9日 別所沼公園·別所沼会館 完成作品お披露目:ヒアシンスハウス前庭(体験者:150人) 美術インスタレーション:平田五郎 シンポジウム:別所沼会館大会議室(参加:54人) パネリスト:上記審査員等 司会:種田元晴 創作ダンス「旅する小さな家 |公演:ヒアシンスハウス前庭 (来場者:118人)

最優秀賞:水谷隼人+山本恭代「2つの場所で起こるこ と (東京)

優秀賞:鈴木理絵「木の舟、ハンモックのようなゆらりゆ れる=日月 (東京) 笹本佳史「NAYAの方舟」(東京)

佳作賞:松村一樹「階段の家」(京都) | 小峰彰馬「旅の輪郭」(千葉) 梅田朋佳「Subliminal Connector」(兵庫)

大峯竣平「絵描きのための小さな〈布の家〉」(石川) 特別賞:野見山由美子「光と風を連れて旅する家」(埼玉) 井上唯+黒澤清高+斉藤健+吉田智重「旅をつむぐ家」

萬代基介「スポンジハウス」(東京) 下門英治+柿澤高子「サイタマ ミノムシ」(東京) 畑克敏+木元洋佑+熊井康博+福井遼+高橋拓海「住

観客賞:山本悠介「旅する"入れ子の家"」(一席)(東京) 下平万里夫「大自然を旅する美術館」(二席)(神奈川) 入口可奈子「山椒魚の家」(三席)(神奈川)

字地のハウス (東京)



五郎さん